



竹原義二の独立住宅作品に見るアプローチの操作手法について

李, 路陽

遠藤, 秀平

(Citation)

神戸大学大学院工学研究科・システム情報学研究科紀要, 8:27-34

(Issue Date)

2016

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009650>



【研究論文】

竹原義二の独立住宅作品に見るアプローチの操作手法について

李 路陽^{1*}・遠藤 秀平¹

¹ 工学研究科建築学専攻

(受付: May 10, 2016 受理: November 25, 2016 公開: December 2, 2016)

キーワード: 竹原義二、独立住宅、アプローチ、曲折性、存在形態、物理形態

本研究は建築家である竹原義二の独立住宅作品に着目し、国内の主要な建築専門雑誌から作品をピックアップし、そのアプローチの操作手法を解析することで、竹原の独立住宅に関する設計手法の一端を明らかにした。結果として、(1) 折れ曲がりといった手法によりアプローチ動線を曲折にすることを明らかにした。(2) 入口の位置や敷地の間口に対応した多様なアプローチの存在形態を明らかにした。(3) 入口の内側を含んだアプローチ空間における空間の開放性から見た性格とその変化や折れ曲がりの方法などの解析から、アプローチ空間の物理形態をコントロールする手法を明らかにした。

1. はじめに

1.1 竹原義二とその住宅設計観

徳島県出身の建築家竹原義二氏は、多数の建築作品を実現し^{注1)}、特に住宅、保育所、老人施設など人の暮らしを原点にしたものが数多く、住宅作家とも言われている^{注2)}。1980年代から、手掛けた作品は住宅設計専門誌に100回以上掲載され^{注3)}、作品のスタイルの経年的な変化が少なく、一貫性のある作品として安定性が示されており^{注4)}、注目を集めている。

このように建築専門誌の掲載頻度の高い、長年に渡って注目されている竹原の言説や作品解説を概観的に見ると、竹原は人を内部空間まで誘うアプローチ空間の配置を重視していること^{注5)}、特に玄関まで容易に到着させず、動線を折れ曲がりによって人を立ち止まらせる配慮が多く見受けられる^{注6)}^{注7)}。作品例を挙げれば、1985年に竣工された「粉浜の家2」では、間口3.5m、奥行約10mの極小敷地に、アプローチは建物と道路の間に配置された小さなコートを経て内部に入るまでは4回の折れ曲がりがある。また、住宅設計について他の建築家が住宅アプローチを配慮することも見受けられる^{注8)}。以上のことから、アプローチ空間の配置は住宅設計にとって不可欠な項目であり、その操作方法を把握することが竹原の住宅設計観を知る上で、重要な解析項目と考えられる。

1.2 既往研究のレビューと本研究の目的

独立住宅の設計手法についての関連研究は、大きく住宅の内部空間における室の形状や配列による空間の分節形式^{注9)}、内外部空

間の構成やつながり方^{注10)}、外部空間の形態や構成^{注11)}などを検討したものに分類できる。その内、特定建築家の作品を対象とした研究は、吉田五十八の作品に見る近代住宅の出入口の変容を明らかにしたもの^{注12)}、清家清の住宅作品における空間の伸縮性を考察したもの^{注13)}、竹原義二の住宅作品を通して写真や言葉の解析からその光と影、素材に見る暗さの手法による内外の空間関係を考察したもの^{注14)}などがある。

以上の関連研究の中に、住宅の内外空間の關係に着目した研究は、内外空間の位置関係や各室と外部のつながり方、内外空間の境界などから解析したものがほとんどであり、人を住宅内部に誘うアプローチ空間のあり方に着目したものは見当たらない。本研究はアプローチ空間の具体的形態という視点を切り口として、室内外空間の關係を解明することは既往研究と異なる点と言える。そこで、本研究はランドスケープ的なアプローチ空間を重視した竹原義二の独立住宅作品を対象に、そのアプローチの操作の手法を解析することで、竹原義二の独立住宅設計手法の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

竹原義二の住宅設計手法を解析するために、資料の調査や本人へのインタビュー(2016年1月28日実施)を行った上、キーワードをまとめ、その設計手法の中に特徴的なポイントとしてアプローチ空間の配置を分析項目としてピックアップした。研究対象は、竹原義二の独立住宅作品の内、国内の主要な建築専門雑誌^{注15)}に掲載された、分析に十分な資料を得られる78件の作品とした。

アプローチ空間の特徴は、その配置やアプローチ動線の曲折性、長さ、及び空間の物理形態の差異とその変化などに決められる。これらの特徴の解析からアプローチ空間の特徴を捉えることができる。アプローチの曲折性について、筆者らの先行研究^{注16)}は現代独立住宅作品を対象に、アプローチ動線の曲折性の経年変化を検討した。本研究はその曲折性に対する解析の方法を踏襲した上、分析項目を増やした。具体的な研究方法は以下である。

- (1) アプローチ動線の折れ曲がり数にみる曲折性の経年的変化を検討し、先行研究の結果と比較することで竹原作品のアプローチの曲折性の特徴を明らかにする。
- (2) 入口の所在位置からアプローチの配置形式を分類し、配置形式を、要因である敷地の寸法から検討し、さらに曲がりの数も含めて配置形式ごとに幾つかの存在形態を考察する。
- (3) 構成要素からアプローチを曲がらせる方法を検討し、また空間の開放性から入口の内側も含んだアプローチ全体の空間的な性格とその変化を捉え、アプローチ空間の物理形態の特徴を明らかにする。

3. アプローチの操作手法

本章では、人を住宅の内部に誘うアプローチを対象に、その曲折性、存在形態、物理形態などを解析することで、アプローチの操作手法を明らかにする。

まず、表1のように全事例^{注17)}の敷地規模、寸法、アプローチの水平距離、折れ曲がりの数、建築の入口の所在位置などの情報を整理した。敷地規模では、48㎡から1501㎡まで見られ、その内「100～200㎡」(25/80)に該当する事例が最も多い。アプローチ動線の水平距離では、1.5mから25.5mまで見られ、その内「5～10m」(37/80)に該当する事例が最も多い。曲がり数では、まっすぐのタイプ「0」から6回曲がりのタイプまで見られ、曲がり数の「1」(22/80)と「2」(26/80)に該当するアプローチが主要である。(表2)

アプローチの配置形式は建築の入口との関係が深いと考えられるため、入口が建築の前側^{注18)}にあるか後側にあるかなど入口の所在位置によりアプローチを表3のように、4つの類型に分けた。入口が建築の前面方向に位置する場合は「前面配置」に、建築の横に位置する場合は「側面配置」に、アプローチ動線が建築ボリュームに囲まれた中庭を経て、そこに位置する入口に到着するものを「中庭配置」に、入口が建築の後側に位置するものを「背後配置」にする。結果として、事例数の最も多い類型は「前面配置」(50/80)である。

3. 1 アプローチ動線の曲折性

本節では、各アプローチの曲がり数の年代別での平均値の変化を検討する。図1のようにアプローチ動線の曲がり数は1980年代の1.36から増加し、2000年以後平均曲がり数は2以上に至って、アプローチ動線の曲折性は年代の経過により増加し、複雑なアプローチ動線による豊富なアプローチ空間を演出することが竹原のアプローチの操作手法として明らかになった。さらに、竹原の作品に見るアプローチ動線の曲折性と同時期の日本の独立住宅におけるアプローチ動線の曲折性^{注19)}とを比べてみると、図1に示したように、1980年代から一般的独立住宅作品のアプローチ動線の曲折性は減少するのに対して^{注20)}、竹原の作品ではアプローチの曲がりは増加していくことから、竹原のアプローチにおけるより

表1 敷地とアプローチの基本情報

番号	作品名	竣工年月	敷地の情報			アプローチの情報		
			敷地面積	間口	奥行	水平距離	折曲の数	入口の所在位置
			単位: ㎡		単位: m			●: 前 ○: 側 △: 中 ×: 後
01	西明石の家	8303	198.37	17.5	11.4	6.5	3	●
02	粉浜の家2	8502	91.5	5.8	15.7	4	4	●
03	深井中町の家	8512	96.92	6.5	15	3.8	1	○
04	阿弥の家	8612	144.98	11	13.2	12	2	○
05	依羅通りの家	8709	98.04	6.6	15	7.5	1	○
06	石丸の家	8805	252.9	18	14	3	0	●
07	西中島の家	8809	90.31	7.9	11.5	9.8	2	△
08	楠町の家	8812	271.87	11.7	23.3	8	0	●
09	千里山の家	8903	272.45	10	27	5	0	●
10	寿町の家	8904	155.06	6.8	22.7	2.5	0	●
11	本庄町の家	8907	212.55	12.9	20	7	2	●
12	吉見ノ里の家	9011	577.59	29.3	19.7	12	0	●
13	御崎の家1	9111	64.44	6.9	9.3	2.2	1	●
14	御園の家	9112	103.93	10.9	9.5	2	0	●
15	真法院町の家	9205	181.42	11.5	15.8	13	3	○
16	山坂の家1	9206	148.92	13.6	11	4	0	●
17	玉串川の家	9210	267.52	26.5	17.6	7	1	●
18	印田の家	9303	375.17	22.5	16.6	13	1	○
19	千里園の家	9305	478.47	24.4	19.6	15	1	○
20	小路の家	9308	62.94	5.4	11.6	6	1	○
21	久御山の家	9312	509.09	11.1	46	22.5	2	○
22	御崎の家2	9404	176.27	9.8	18	16.5	1	△
23	朱雀の家	9411	327.46	21.3	15.4	8	3	●
24	宝山町の家	9505	316.77	20.4	15.4	4	1	●
25	帝塚山の家	9505	327.76	19.9	16.4	9	3	●
26	向陵中町の家	9601	65.7	6.36	10.3	6	2	●
27	魚崎北町の家	9610	132.51	11.5	11.5	6	1	△
28	山坂の家2	9611	116.41	5.9	19.8	11.3	1	○
29	浜松の家	9701	380.16	17.7	21.5	8	1	●
30	南河内の家	9701	300.66	13.8	21.7	18.4	2	●
31	目神山の家	9702	1501	29.7	50.5	27	6	●
32	東広島の家	9703	525.31	19.2	27.4	9	4	●
33	広陵町の家	9706	235.88	11	21.5	9.8	3	△
34	城崎の家	9712	110.89	8.8	12.6	13.4	2	×
35	千里丘の家	9804	174.33	8.4	11.2	15	1	○
36	新千里南町の家	9812	355.37	19.2	18.5	16	4	△
37	夙川の家	9901	66.48	6.2	10.8	8.5	1	△
38	武蔵小金井の家	9901	156.16	12.9	12.1	1.5	0	●
39	比叡平の家	0001	394.66	18.4	21.4	9	3	●
40	六番町の家	0004	224.89	9.8	22.9	8	3	●
41	鷲林寺南町の家	0006	868.85	33.7	25.8	22.5	6	△
42	東豊中の家	0102	185.69	17.8	10.5	15	1	○
43	箱作の家	0104	297.3	16.6	17.9	8	3	●
44	加守町の家	0108	101.54	6.3	16.1	6.8	0	●
45	明石の家	0108	228.41	16.3	14	6	2	●
46	高柳の家	0109	48.56	5.3	9.2	3	2	●
47	大社町の家	0112	99.75	7.4	13.9	10	3	○
48	101番目の家	0205	108.9	6.7	16.5	5.5	1	○
49	岩倉の家	0207	164.85	15.3	10.7	6.8	4	●
50	都島の家	0212	192.91	10.6	18.2	14.3	1	○
51	河内山本の家	0301	491.2	17.6	27.9	13	4	●
52	芦屋の家	0312	397.29	6.5	30	15	2	○
53	額田の家	0404	434.3	18.5	21.5	12	1	○
54	御宿の家	0411	739.63	18.7	39.5	11	2	●
55	粉浜の家4	0503	78.94	4.8	16.4	6.1	2	●
56	岸和田の家05	0505	340.7	14.8	23	21.2	4	●
57	北恩加島の家	0506	108.38	9.2	11.8	7	1	○
58	宮ノ谷の家	0512	295.87	18	16.5	6	0	●
59	北畠の家	0609	254.8	13.3	19	12.5	2	●
60A	深谷の家	0701	194	15	18	13	2	○
60B	深谷の家	0701	186	15	17	27	4	●
61	諏訪森町中の家	0704	406.3	6.5	35	20	2	○
62	諏訪森町東の家	0706	205.3	9.6	21.4	6	1	○
63A	乗鞍の家	0711	622.92	17	15.6	13	4	●
63B	乗鞍の家	0711	622.92	23	15.6	10	4	●
64	小倉町の家	0803	152.2	13.3	11.4	6	1	●
65	永山園の家	0805	135.95	7.5	18	7.5	2	●
66	富士か丘の家	0903	464.54	30.3	15.3	25.5	6	●
67	大川の家	0908	1365.11	21.9	62.4	25	2	×
68	山本町北の家	0911	192.41	17	11.3	8.3	2	△
69	西春の家	1002	331	20.3	16.3	5.3	2	●
70	東淀川の家	1102	337.41	11.8	32.7	13.5	2	●
71	緑町の家	1103	259.87	14.6	17.8	5	2	●
72	新千里南町の家2	1110	343.34	20	17	10	2	●
73	東松山の家	1301	624.86	25	25	8	2	●
74	豊中の家	1305	264.47	12	22	6	2	●
75	五力田の家	1305	144.5	8.3	17.4	6.7	1	○
76	住吉本町の家	1305	116.59	9.8	11.8	1.7	2	○
77	金岡の家	1312	537	18	30	18	4	●
78	十ノ坪の家	1502	354.21	16.6	21.3	9	2	●

表2 基本情報の整理

敷地規模	アプローチの水平距離		アプローチの曲がり数	
100㎡未満	11	0～5米	13	0回
100～200㎡	25	5～10米	37	1回
200～300㎡	15	10～15米	18	2回
300～400㎡	15	15～20米	5	3回
400㎡以上	14	20米～	7	4回
注：単位のない数字は該当する事例数を示す。				5回
				6回
				0

表3 入口の位置により分類

類型	前面配置	側面配置	中庭配置	背後配置
模式図				
記号	●	○	△	×
事例数	49	21	8	2

多い折れ曲がりによる空間の配置形態は同時期のものと区別し、竹原作品のユニークな特徴とも言える。これに対する竹原の言説により、折れ曲がりによって、シーンの展開が変わり^{注21)}、訪問者は折れ曲がりながら自然の動きを感じ取り、気持ちを整えて家に入るようになると考えられる^{注22)}。

3.2 アプローチの配置形式と存在形態

本節では、表3で分類したアプローチの配置形式と敷地条件の関係を検討し、配置形式の要因を明らかにする。また、アプローチの曲折性から配置形式ごとに幾つかの存在形態をまとめる。

表1に示した各敷地の間口と奥行の値と表3で分けた各配置形式を図2のように散布図として示している。横軸に敷地の間口の値を、縦軸に敷地の奥行の値をとっている。図2から、ほとんどの事例の間口の幅は5m以上、奥行は10m以上である。結果として、21件の○記号と標記されている「側面配置」の事例のほとんど(16/21)は、間口が12m以内の範囲に分布していることが示された。また、△記号の「中庭配置」の事例の大半(5/8)も間口の値が12m以内に該当している。●記号の「前面配置」の事例も含めると、敷地の間口が12m以内の場合、○と△の事例数(計21件)は●の事例数(14件)を超えたことがわかった。間口が12m以上の場合、「前面配置」に該当する事例がほとんどである。一方、奥行の値と配置形式の関係は見受けられなかった。以上のことから、敷地の間口の幅がアプローチの配置形式に影響を与える要因として挙げられ、間口の幅が狭い場合、建物は間口の幅の一部のみ占め、アプローチが建物の横を経て建物の側面や中庭に位置する入口に到着するアプローチの配置形式が多用されていることがわかった。

次に、アプローチ動線の曲がり数と入口の位置から、アプローチの存在形態を検討する。図3に示したように、配置形式ごとにアプローチの存在形態として幾つかのパターンが得られた。

「前面配置」では、アプローチ動線は折れ曲がりせず、まっすぐに入口に到着するものを「1-1」に、入口は前面道路に向き、アプローチが複数回の折れ曲がりがあるものを「1-2」や「1-3」に、入口の方向は道路と垂直し、アプローチは1回折れ曲がってから入口に到着するものを「1-4」に、複数回折れ曲がるものを「1-5」にした。該当する事例数から、「前面配置」では入口が道路に向きながらアプローチは複数の折れ曲がりがある「1-2」や「1-3」

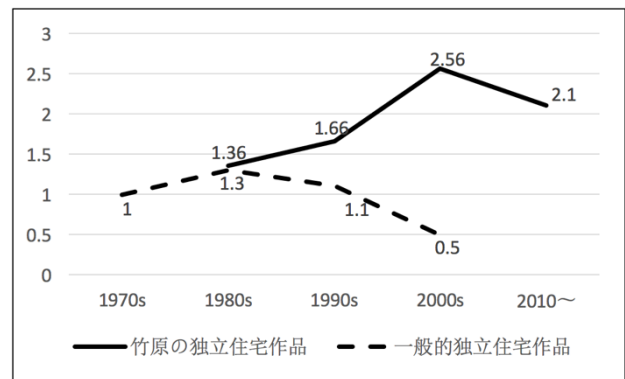


図1 アプローチ動線の曲り数の年代的变化

が主要タイプとして挙げられる。

「側面配置」では、アプローチが建物の横の空間から入り、建物の側面にある入口に到着するものを「2-1」に、建物と道路の間で折れ曲がって建物の横を経て入口に到着するのを「2-2」に、建物の横から入り、ポーチが建物の側面から凹んで、2-1より玄関に入る前にもう一度折れ曲がるものを「2-3」にした。事例数から、「側面配置」において「2-1」のように動線がよりシンプルなタイプが主要であることがわかった。

「中庭配置」では、アプローチが建物の横の空間から入り、中央部に位置する中庭を経て、そこにある入口に到着するものを「3-1」に、中庭がL字形の建物に囲まれ、アプローチが道路側に2回折れ曲がってから敷地の中央部にある入口に到着するのを「3-2」に、2棟の建物が対峙され、アプローチが複数の折れ曲がりから建物の中庭側にある入口に到着するものを「3-3」や「3-4」にした。以上のアプローチの形態はいずれも該当する事例数は少ない。

「背後配置」では、いずれも入口が建物の後側に位置し、アプローチが建物の横を経るか、ボリュームが上げられた建物の下を経るものを「4-1」や「4-2」にした。二つの形態に該当する事例はいずれも1件のみである。

以上の解析から、竹原の住宅作品のアプローチは建物の入口の位置や方向によって、多様な存在形態を特徴としていることを明らかにし、アプローチの曲折性は配置形式（特に前面配置と側面配置）により変化する傾向が見られた。

3.3 アプローチ空間の特徴

本節では、アプローチ動線の折れ曲がりを引き起こす手法、アプローチ動線の所在空間の開放性から見る空間の性格（入口内側の空間も含む）などの解析から、全アプローチの物理形態を検討する。

まず、全事例のアプローチ動線の折れ曲がりを引き起こす要素（折れ曲がり要素と呼ぶ）とアプローチ空間の性格を分類した。図4のように、折れ曲がりを引き起こす要素を壁、樹木など「立体要素」と床面の舗装材やレベルの変化など「床面要素」に分けた。「立体要素」では、壁や樹木に突き当たってから曲がる「壁」と「樹木」、他空間領域に入る前の分節である「空間分節」、そして「壁」のように壁に突き当たり、壁の高さが目線より低いものを「低い壁」に分けた。「床面要素」では、舗装材の曲がりによる動線を曲がらせる「舗装」、舗装により動線が明確されていないが異なる床材の境界により動線を曲がらせる「床材分節」、階段や床面のレベルの変化により曲がらせる「階段」と「レベル変化」に分けた。以上の折れ曲がり要素は計8種類が挙げられ、

注：No. 31の「目神山の家」とNo. 67の「大川の家」は超大型敷地のため、本図から外した。

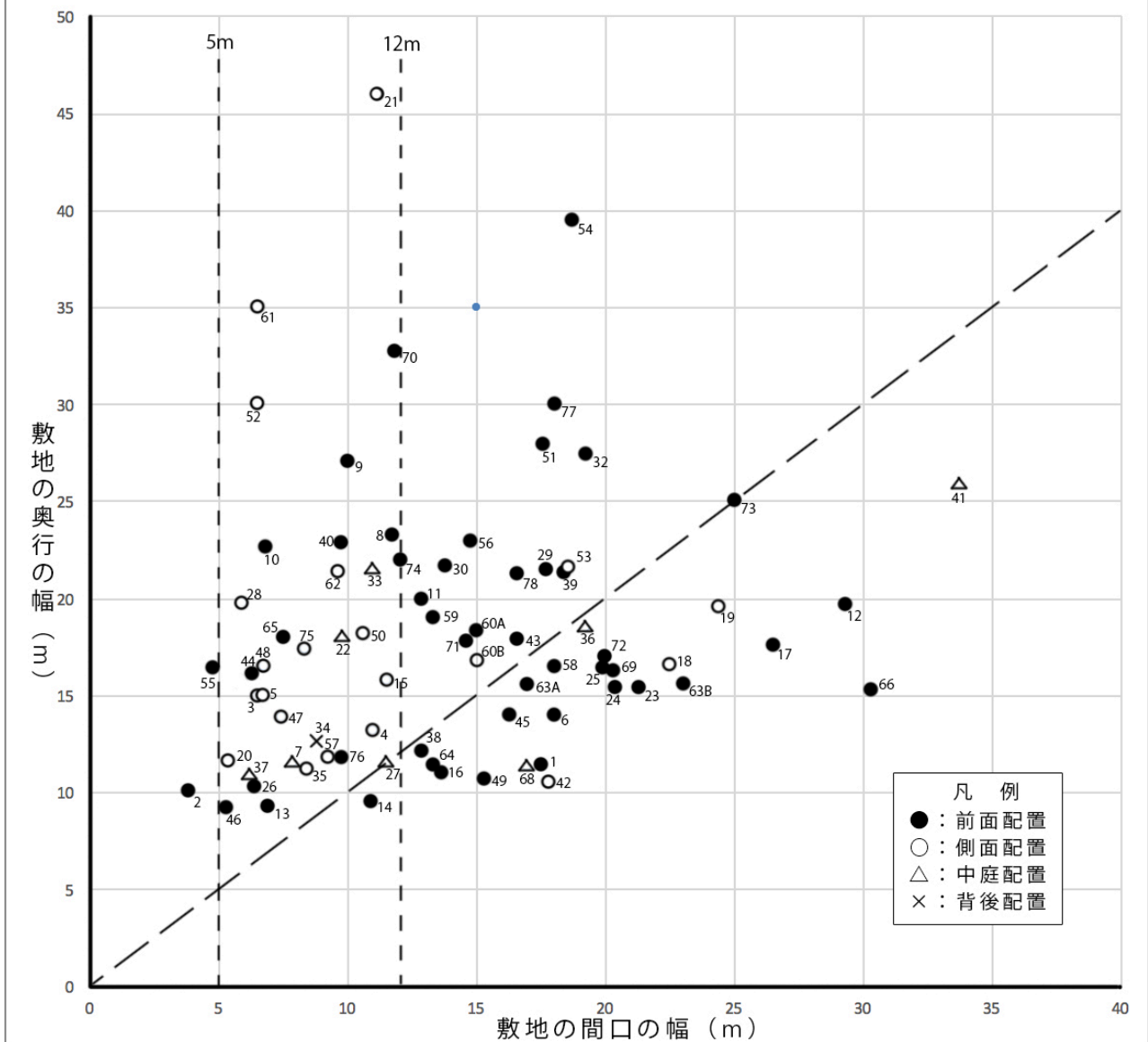


図2 敷地規模・寸法とアプローチの配置形式の関係












前面配置			側面配置		中庭配置			背後配置		
 1-1	06, 08, 09, 10, 12, 14, 16, 38, 44, 58	 1-4	 2-1	03, 04, 05, 18, 19, 20, 28, 35, 42, 48, 50, 53, 57, 62, 75	 3-1	22, 27, 37	 3-4	36, 41	 4-1	67
 1-2	11, 13, 26, 30, 45, 46, 54, 55, 59, 65, 69, 70, 71, 72, 73, 74, 76, 78								 1-5	01, 23, 25, 39, 40, 43
 1-3	02, 31, 32, 49, 51, 56, 60B, 63A, 63B, 66, 77		 2-3	52, 60A, 61	 3-3	33				

図3 アプローチの存在形態

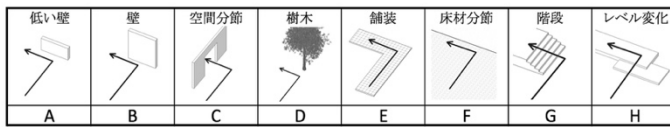


図4 折れ曲がりの要素

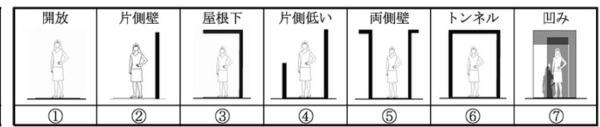


図5 アプローチ空間の開放性に見る性格

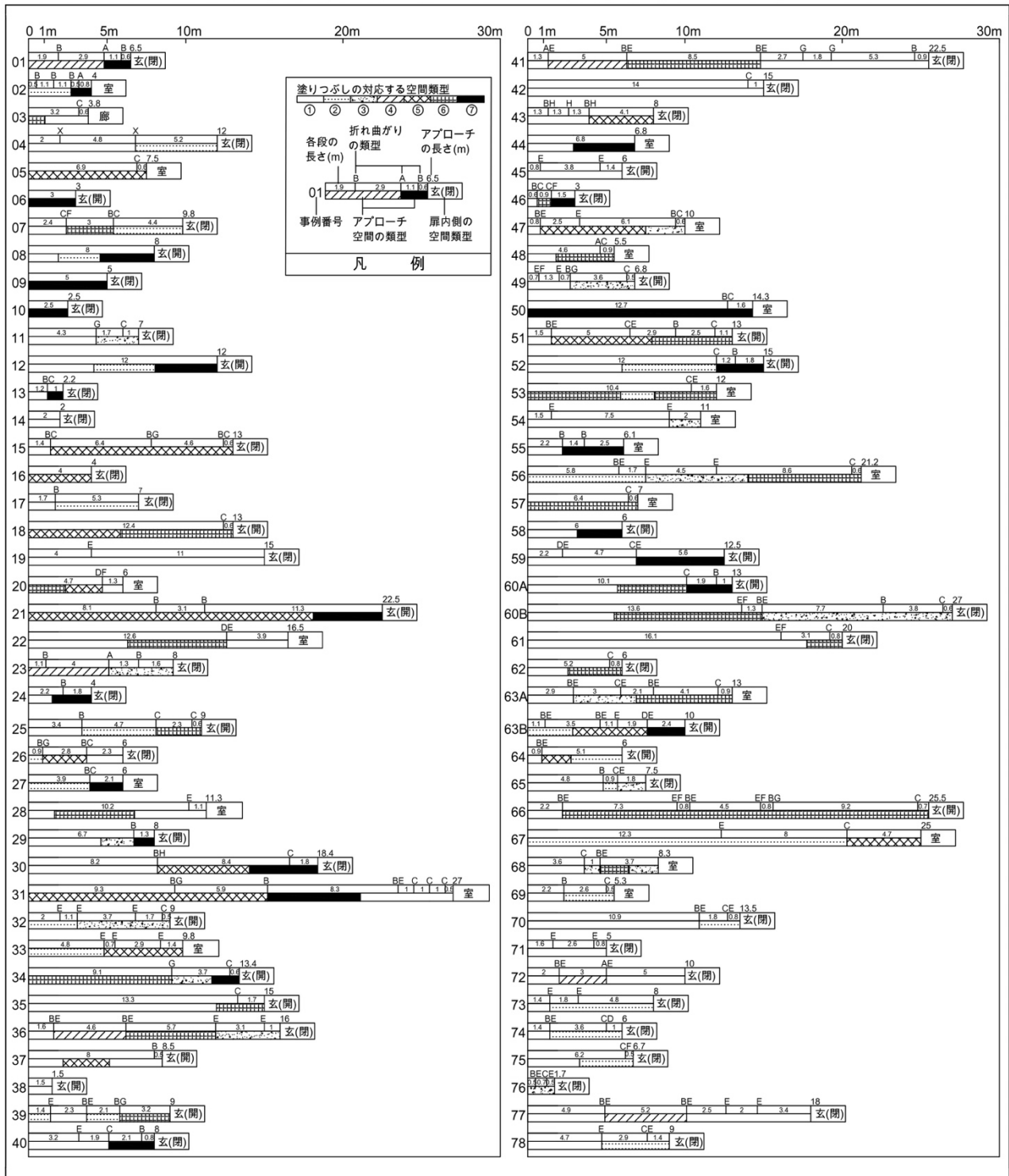


図6 アプローチ空間の実態

表4 各折曲類型の事例数

類型	個数	類型	個数
E	29	A	3
C	27	CF	3
B	25	DE	3
BE	24	BH	3
BC	9	AE	2
CE	8	DF	1
BG	6	H	1
EF	5	AC	1
G	4	CD	1

表4、表5注：表中の数字は該当する事例数を示す。

表5 主要折曲タイプの年代的变化

類型	1980s	1990s	2000s	2010s	合計
立 面 要素	C 3	B 9	15	1	28
	B 5	10	9	1	25
	BC 1	5	3	0	9
	合計	9	24	27	62
南 方 の 組 合	BE 0	3	15	6	24
	CE 0	0	5	3	8
	BG 0	3	3	0	6
	合計	0	6	23	38
床 面 要素	E 0	10	12	7	29
	EF 0	0	5	0	5
	合計	0	10	17	34

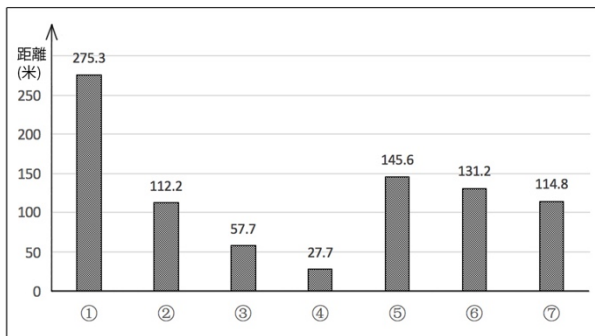


図7 各空間性格の総距離

表6 入口内外側の空間変化

空間変化の 類型	特徴	事例番号	合計
⑤, ⑥ or ⑦ ↓ 室 or 玄 (開)	閉 ↓ 開	02, 05, 06, 08, 12, 18, 21, 25, 27, 29, 33, 34, 35, 39, 44, 48, 50, 51, 62, 63, 55, 56, 57, 58, 59, 60A, 63A, 63B, 66, 67	30
①, ② or ③ ↓ 廊 or 玄 (閉)	開 ↓ 閉	03, 04, 07, 11, 14, 17, 19, 23, 26, 36, 41, 42, 60B, 65, 70, 71, 72, 73, 74, 75, 76, 77, 78	23
⑤, ⑥ or ⑦ ↓ 廊 or 玄 (閉)	閉 ↓ 閉	01, 09, 10, 13, 15, 16, 24, 30, 40, 43, 46, 61, 62	13
①, ② or ③ ↓ 室 or 玄 (開)	開 ↓ 開	20, 22, 28, 31, 32, 37, 38, 45, 47, 49, 54, 64, 68, 69	14

表7 空間の開放性の変化

空間変化の 類型	事例番号	合計
単一	05, 06, 09, 10, 14, 16, 19, 38, 42, 45, 50, 57, 71, 76	14
減少	01, 02, 04, 08, 11, 12, 13, 15, 17, 18, 21, 22, 24, 25, 27, 29, 30, 32, 33, 35, 40, 43, 44, 46, 49, 51, 52, 54, 55, 56, 58, 59, 60A, 61, 62, 63A, 63B, 65, 66, 67, 69, 70, 73, 74, 75, 78	47
増加	03, 20, 23	3
減少→増加	07, 26, 28, 31, 36, 37, 41, 47, 60B, 64, 68, 72, 77	13
増加→減少	34, 39, 53	3

記号はA～Hとする。折れ曲がりの箇所は複数の要素がある場合、該当する要素の記号を合わせて記述する(例: BE)。アプローチ空間の性格では、図5のようにアプローチが通過する空間を開放性の強い順で、物理的空間制限のない「開放空間」、動線の片側に壁がある「片側壁」、片側の壁の上から屋根を伸ばし動線の上空を覆う「屋根下」、両サイドに壁があるがどちらかが目線の高さ以下である「片側低い」、動線は平行する二つの建築ボリュームや壁に挟んでいる「両側壁」、建築ボリュームの領域を通過する「トンネル」と建築ボリュームに凹んで形成した「凹み」に分けた。以上の空間性格は計7種類が挙げられ、記号は開放性の高い順で①～⑦とする。入口内側の空間では、玄関、家族室と廊下の3種類が見受けられ、「玄」、「室」と「廊」で記述する。その内、事例数の最も多い玄関では、開口により視線の広がり有無によりさらに「玄(開)」と「玄(閉)」に分類した。以上の折れ曲がり要素、空間性格の類型(入口内側の空間も含む)、動線の各区間の長さの情報を合わせて、全事例のアプローチの実態を図6のように整理した。

折れ曲がりを引き起こす要素の類型を見ると、全対象における各類型とその事例数を表4のように整理した。事例数の多い類型は「E」(29件)、「C」(27件)、「B」(25件)、「BE」(24件)である。次に、事例数の5以上の類型を主要類型としてあげられ、立体要素のみ、床面要素のみと両方の組合せ別で、その事例数の年代的变化を表5のように検討した。結果として、最初の1980年代は「立体要素」は全部の事例を占め、年代の経過とともに「床面要素」や「両方の組合せ」に該当する類型は増加し、2010年以後は「立体要素」が少数になり、床面の仕上げ材やレベル差の操作を含んだ

折れ曲がり方式が主要となったことがわかった。このことから、アプローチ動線は、壁など立体的な要素による物理的に曲がらせるタイプから、床材やレベル差の操作による曲がらせるタイプまで変化する傾向が見られた。

アプローチ空間の性格を見ると、まずは建物入口の内外両側における空間の性格の変化を検討する。入口の外側の空間は④以外の類型に該当し、それらの類型を開放性のより高い①、②、③と開放性のより低い⑤、⑥、⑦に分け、入口の内側の空間をより狭い「玄(閉)」や「廊」とより広く感じられる「室」と「玄(開)」に分けた。建物に入る時点前後の空間性格の変化を表6のように4つの類型とそれらの事例数を整理した。結果として、開放性の低い⑤、⑥或いは⑦から、より広く感じられる室や開口により視線の広がりがある玄関に入る「閉→開」(30/80)と、開放性がより高い①、②或いは③から、視線の広がりのない玄関や廊下に入る「開→閉」(23/80)が全数の大半を占めることから、入口に入る時に空間の開放性の変化が求められていることがわかった。

次に、アプローチの起点から建物の入口まで、アプローチ空間全体の性格とその変化を検討する。図7のように、①～⑦の各空間性格類型に該当する動線の水平距離の合計値を示している。開放性の最も強い①が最も主要な性格であることがわかった。一方、開放や閉鎖とはっきり言えない③と④の採用は最も少ない。空間性格の変化を見ると、全事例のアプローチ空間は一つの空間類型のみがあるものや複数の空間タイプの組合せたものが見られ、それらの空間の開放性として無変化や一回変化、二回変化など、開放性がどのように変化するかにより変化の方式を表7のように、変化のない「単一」、一回変化する「減少」や「増加」、二回変化する「減少→増加」や「増加→減少」の五つの種類に分け、それらの該当する事例数を整理した。結果として、開放性のより高い空間からより閉鎖的な空間まで変化する「減少」の事例数は半分以上(47/80)であり、最も主要な変化方式だと分かった。また、より閉鎖的な空間からの変化方式である「増加」や「増加→減少」の事例数はいずれも3件のみあり、最も少ない。

以上のアプローチ空間の性格の解析から、竹原はアプローチや入口内外の両側における空間の開放性の変化を求めることが見受けられた。

4. 結論と考察

本研究は、建築家竹原義二の独立住宅作品を対象に、人を住宅内部に誘うアプローチの曲折性、存在形態、物理形態などの解析から、竹原義二の住宅設計手法の一端を明らかにした。結論は以下である。

- (1) アプローチ動線の曲折性は一般の住宅作品より高いことが竹原作品の特徴としてわかった。
- (2) 入口の位置や敷地の間口の幅に影響したアプローチの配置形式と動線の曲折性の検討から、アプローチの多様な存在形態が挙げられた。
- (3) アプローチの折れ曲がりを誘導する方法は壁など立体要素で物理的な操作から、床材の操作など人の心理に影響する方法に変化する傾向が見られ、空間の開放性はアプローチ空間のみならず入口の内側まで変化する性格が見受けられた。

以上の結論から、動線をはっきり規定されていない床材の操作からアプローチを折れ曲がらせ、多様な存在形態を作り出しながら、開放性が変化する空間も演出され、アプローチの動線曲折化、

形態多様化、空間曖昧化といった操作手法を明らかにした。

日本の住宅は、明治期から洋風化され続ける結果、現代の住宅は和と洋のどれとも明快に言えない和洋折衷タイプが標準的になった。竹原義二は多数の提案と独自の発想を展開し、日本伝統建築における曖昧なアプローチを現代の住宅に巧みに取り入れ、住宅での人と自然のかかわりといった人と環境の関係についての解答を寄与できると考える。特に、狭小敷地でのアプローチの配置手法は、独立住宅の敷地が狭小化し続ける背景下、狭い空間をより広く感じさせ、住宅本体に入るまでの距離、時間軸をコントロールすることで伸ばし、より豊富な景観演出を醸出できる一方、心理的緩衝も作り出している。

本稿で明らかとなったアプローチの操作手法は、現代独立住宅の設計にとって参考資料と考えられ、応用も可能な知見と考える。尚、本稿はランドスケープ分野に視座をおく研究とも言え、竹原義二のほかの住宅設計手法を別稿で取りあげる予定である。

参考文献

- 1) 竹原義二：竹原義二の住宅建築，TOTO 出版，2010. 4
- 2) 竹原義二：無有，学芸出版社，2007. 3
- 3) 竹原義二：場の力を読む一動かすこと/止まらせること，住宅特集 1995-09，P86-97
- 4) 平野敏之：街と家の間 緑のアプローチ 7 題，住宅建築 2002-08，P102-103
- 5) 塚本由晴、坂本一成：現代日本の住宅作品における空間の分節と接続—住宅建築の構成形式に関する研究、日本建築学会計画系論文集 465、P85-93、
- 6) 塚本由晴、坂本一成：現代日本の住宅作品における空間の分割—住宅建築の構成形式に関する研究、日本建築学会計画系論文集 478、P99-106、1995. 12
- 7) 根本理恵、坂本一成：住宅の主室における室形状と室内要素の配列による空間構成—現代住宅作品の構成に関する研究、日本建築学会計画系論文集 654、P1889-1895、2010. 8
- 8) 小川次郎、小野田環、坂本一成：外形ヴォリュームと室の配列による建築の構成—現代日本の住宅作品における内外の関係による構成形式、日本建築学会計画系論文集 537、P117-123、2000. 11
- 9) 遠藤康一、塩崎太伸、奥山信一：敷地境界との関係にみる不整形敷地に建つ住宅作品の平面輪郭—建築と敷地の対応関係に関する研究、日本建築学会計画系論文集 80、P579-589、2015. 3
- 10) 村田涼、根ヶ山愛子、安田幸一：現代日本のコートハウスにおける中庭の設えと居間との連携、日本建築学会計画系論文集 676、P1365-1371、2012. 6
- 11) 岡村航太、小川次郎、坂本一成：外部空間の配列と接続からみた都市型住宅作品の構成—現代日本の住宅作品における内外の関係による構成形式(2)、日本建築学会計画系論文集 552、P141-146、2002. 2
- 12) 塚本由晴、繁昌朗、坂本一成：現代日本の住宅作品における外部空間の分節と統合—住宅建築の構成形式に関する研究、日本建築学会計画系論文集 470、P95-104、1995. 4
- 13) 村田涼、永野敏幸、安田幸一：現代日本コートハウスにおける外部生活空間の配置と開放性、日本建築学会計画系論文集 661、P569-576、2011. 3
- 14) 大井隆弘：吉田五十八の住宅作品を通してみる近代住宅の出入口—勝手口の減少および内玄関と勝手口の近接傾向について、日本建築学会計画系論文集 704、P2299-2306、2014. 10
- 15) 府中拓也、是永美樹、柴田晃宏、金子晋也：清家清の住宅作品における建具を介した主空間の伸縮性、日本建築学会計画系論文集 73、P465-470、2008. 2
- 16) 小林智行、鈴木毅、松原茂樹、木多道宏：建築空間における暗さのデザイン—建築家、竹原義二を事例として、日本建築学会大会学術講演梗概集(北海道)、P1141-1142、2013. 8
- 17) 小林智行、鈴木毅、松原茂樹、木多道宏：建築空間における暗さのデ

ザインの研究—建築家、竹原義二を事例として、日本建築学会近畿支部研究発表会、P101-104、2013. 5

- 18) 李路陽、沈悦、山本聡、遠藤秀平：現代独立住宅作品における庭の形態及び構成の特徴に関する研究、ランドスケープ研究、VOL. 78, No. 5, P477-482, 2015. 3
- 19) 竹原義二：アプローチの濃密さを決める、ディテール 2006-01, P60-63 注
- 注 1) 参考文献 1) の P296 により、竹原は 2010 年(文献の出版年)まで 150 件の作品ができ、1978 年に竣工した 1 番目の作品「勢野の家」から 1 年に約 4.8 件のペースである。
- 注 2) 参考文献 1) の P138 で、藤森照信が「竹原義二の作品も名前も日本の建築界ではよく知られている。大阪を代表する住宅作家として広く名は通っている。」と評価した。
- 注 3) 独立住宅作品だけを見ると、2015 年に竣工した「十ノ坪の家」まで、竹原義二の作品は専門雑誌に計 96 回掲載された。これ以外是非独立住宅作品もいくつか掲載され、計 100 回以上がある。
- 注 4) 参考文献 1) の P296 で、花田佳明が「これら 150 作品を通覧して驚くのは、完成度の一貫した高さと、それらをいくつかのスタイル、あるいは時期へと分類し区分することの難しさだ。変化のあるとすれば、増加した年間竣工件数だけだとすら言いたくなる。(中略) それほどに 150 作品のレポエルは揃っており、あたかも最初からすべて竹原の頭の中にあっただかのようだ。しかしこの多様性は、実際には 30 歳から 60 歳までの時間の中で生み出されており、彼の早熟ぶりと才能の安定性を示す証拠以外の何ものでもない」と評価した。
- 注 5) 「初めて訪れる住宅は、とても心がワクワクする。そこに住む人の気持ち伝わってくるようなアプローチ空間について、住宅の設計を始めた時から随分と考えている。」(参考文献 19、pp. 60)
- 注 6) 「僕はいつも立ち止まるという行為が重要だと考えています。立ち止まるというのは、距離が短ければ短いほどとても大事になってくるように思います。」(参考文献 3、pp. 88)
- 注 7) 「玄関へは容易に到着させない。敷地に余裕がなく、アプローチ空間をほとんど取ることができないでも、必ず一度は立ち止まらせる。」(参考文献 2、pp. 103)
- 注 8) 「初めて建主の敷地を見せていただいたとき、脳裏をかすめることのひとつとして、玄関をどこに位置させるのかがある。それはとりもなおさず建主へ気持ちのよいアプローチ空間を提案したいからにほかならない。」(参考文献 4、pp. 102)
- 注 9) 参考文献 5)、6)、7) とそのほかが挙げられる
- 注 10) 参考文献 8)、9)、10) とそのほかが挙げられる
- 注 11) 参考文献 11)、12)、13) とそのほかが挙げられる
- 注 12) 参考文献 14)
- 注 13) 参考文献 15)
- 注 14) 参考文献 16)、17)
- 注 15) 本研究は「住宅特集」や「住宅建築」、「建築文化」など建築専門雑誌から事例をピックアップした。
- 注 16) 参考文献 18)
- 注 17) 本研究の研究対象は 78 件の住宅作品だが、その中 No. 60「深谷の家」と No. 63「乗鞍の家」は機能が完備している 2 つの棟で構成された二世帯住宅のため、棟ごとに「60A」、「60B」、「63A」、「63B」として扱い、事例数計 80 件である。
- 注 18) 本研究は、アプローチの起点の所在道路を前面道路と定義し、この基準により建物の立面を前面、側面、背後に分けている。
- 注 19) 参考文献 18) P479 の図 5 の結果を引用する。
- 注 20) 図 2 の「2000s」における一般的住宅作品の値「0.5」は、参考文献 18) の分け方により 2000 年～2012 年の平均値を示す。
- 注 21) 「僕はいつも立ち止まるという行為が重要だと考えています。立ち止まるということは、距離が短ければ短いほどとても大事になってくるように思います。(中略) このように、ひとつひとつ立ち止まらせることによってシーンの展開を考えていくわけです。」(参考文献 3、pp. 88)
- 注 22) 「人は立ち止まり、向きを変えたりすることによって、光・風といった自然の動きを敏感に感じ取り、やがて訪れるその家との対面に向けて気持ちを整えていくからである。」(参考文献 2、pp. 103)

[Research Paper]

A Study on the Approach Arrangement Method in Detached House Works of Yoshiji Takehara

Luyang LI¹ and Shuhei ENDO¹

¹*Graduate School of Engineering, Department of Architecture*

Key words: Yoshiji Takehara, Detached House, Approach, Tortuosity, Arrangement form, Physical form

This study is focusing on the detached house works of Yoshiji TAKEHARA, by analyzing the design method in approach arrangement, part of design method of detached house have been revealed. The result is as follows:

- (1). The approaches are complicated by bending the flow.
- (2). The diverse arrangement form of approach which affected by the position of the entrance and the size of site have been revealed.
- (3). By analyzing the method of turning and characteristics of approach space, the control method of physical form has been clarified.